



2017 年 (平成 29 年)
2月号 (No. 861)

公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価 1部 150 円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目 次

謎が解き明かされつつある 鹿島槍ヶ岳・カクネ里雪溪	1
ゴジュンバ氷河の「氷河池に登る」	4
ナンダ・コト初登頂のテン、80年目の発見	6
新入会員	7
クムジュンに耐震性のある教室を再建	8
第11回ピオレール・アジアは韓国・ガンガブル ナ隊と日本・黒部ゴールデンピラー隊が受賞	9
若者の冒険を支援、「谷口けい冒険基金」設立	10
活動報告	11
アルパインフォトクラブ	
支部だより	11
北海道支部／東京多摩支部／ 神奈川支部／宮崎支部	
Climbing & Medicine	76
図書紹介	15
図書受入報告	16
会務報告	17
ルーム日誌	17
会員異動	17
INFORMATION	17
編集後記	19

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木……………10～20時
水・金……………13～20時
第2、第4土曜日……………閉室
第1、第3、第5土曜日……………10～18時

謎が解き明かされつつある鹿島槍ヶ岳・ カクネ里雪溪

北アルプス・後立山連峰の盟主として人気の鹿島槍ヶ岳。その信州側に穿たれたカクネ里雪溪は、かねてから氷河ではないかと言われ、本格的な調査が待たれていた。2012年、立山連峰の3つの多年生雪溪が氷河と確認されたが、それに続いて2014年より、カクネ里雪溪氷河説を解き明かすため学術調査団が結成された。

飯田 肇、福井 幸太郎、小坂 共栄

カクネ里雪溪は、後立山連峰の盟主、鹿島槍ヶ岳の北峰より北東に延びる見事なU字谷内に広がる多年生雪溪(万年雪)である(写真1)。背後の鹿島槍ヶ岳北壁の偉容とともに、周辺に秀麗な雰囲気を醸し出している。

2人の先人たちの慧眼

この雪溪は古くから氷河的な要

素を持つことで有名で、1930(昭和5)年、京都大学の今西錦司氏が初めて現地調査を行ない、「この雪をさして氷河の萎縮した残骸というのならどうだろう」と述べ、氷塊や融氷トンネルや縦穴(ムーラン)の存在などを記述している(今西、1933)。

また、その後の対談で「日本の万年雪で氷河に一番よく似てるのは、

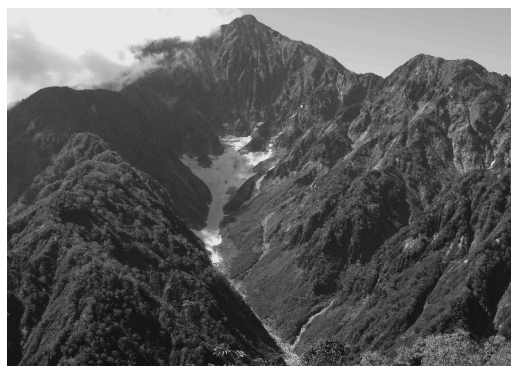


写真1 カクネ里雪溪全景

鹿島槍のカクネ里の万年雪です。あれは雪崩が涵養源になつてますが、アフリカのケニア山の氷河と全く同じ格好のもんや。これら地形的氷河といえるやろね」と述べ、カクネ里雪溪が氷河である可能性を予見していた(今西・吉良、

1983)。今西氏は第12代日本山岳会会長であり、氷河についてもその先見の明に驚かされる。

また、1955(昭和30)～1958(昭和33)年にかけて、地形学者の五百澤智也氏がカクネ里で本格的な現地調査を実施した。この調査でクレバス、融氷水流、ムーランなど氷河の特徴を示す形態を持つ厚い氷体が存在することが確認され、詳細に記載された。また、クレバス内の氷中に数層の汚れ層が存在していること、氷体末端からの流れが白濁していることなども観察されている。これらの成果は、名著『鳥瞰図譜II日本アルプス』(五百澤、1979)に詳細なスケッチとともに記載されていて、この時代にこれだけの調査をされたことは驚嘆に値する。

日本山岳会と関わりの深い2氏により成されたカクネ里雪溪の先駆的調査だったが、この五百澤氏の調査以降約60年間、アプローチの困難などからカクネ里雪溪調査は全く行なわれず、カクネ里の氷河説は未解明の課題として残されることになった。

立山連峰の雪溪が氷河に

しかし最近になって、2012年に、富山県立山カルデラ砂防博物館により、立山連峰の多年性雪溪(万年雪)で日本に氷河が現存することが確認された。氷河であることを確かめるためには、厚い氷体が存在し、それが長期間にわたり流動していることを確認する必要がある。立山や剣岳周辺は、日本でも特に多年性雪溪(万年雪)が多く存在する地域である。その中でも規模の大きな、立山の御前沢雪溪、剣岳の三ノ窓雪溪、小窓雪溪において、氷河確認調査が開始された。調査は、アイスレーダーで氷体の厚さを、高精度GPSで氷体の動きを測定するものだ。その結果、各雪溪において30m以上の厚さの氷体が存在し、1ヶ月間に最大で30cm程度の流動があるこ

とが確認された。これにより、前記の3つの雪溪は現存する氷河であることが示された(福井・飯田、2012)。

カクネ里に学術調査団が

そこで次なる調査対象となったのが、古くから注目されていたカクネ里雪溪だ。大町市より鹿島槍ヶ岳カクネ里雪溪(氷河)学術調査団(市立大町山岳博物館、信州大学、長野県環境保全研究所、富山県立山カルデラ砂防博物館により構成)が結成され、2014年より調査が開始された。調査ではまず、カクネ里雪溪が現存する氷河であるかどうかを明らかにするため、厚い氷体が存在するのか、氷体が流動しているのか、が調べられた。しかし、調査は困難を極めた。秋季に氷体の流動観測に着手したが、カクネ里へは、遠見尾根からシラタケ沢を下りカクネ里出合から登り返す、大変長く困難なアプローチをたどらなければならない。アプローチであるシラタケ沢の雪溪の状態が、崩落を繰り返すなど大変不安定であり、また、カクネ里内では土石流が発生する危険があった。さらに、秋の雪溪上には氷

が露出していて、クレバスが不気味に口を開けている。しかし、山岳ガイドの絶大な支援を得て、2015年秋季にようやく氷体の流動観測を実施することができた(写真2)。

立山・剣岳に匹敵する規模

氷河の厚さを

測るには、アイスレーダーという機械が使われる。アイスレー

ダーとは、氷河の表面から下向きに電波を飛ばし、岩盤からはね返ってくる電波を捕えて、氷の厚さを測定する機械のことだ。近年、登山用ザックに入るくらいまで小型軽量化が進み、アプローチが悪い



写真2 調査地へ向けてカクネ里雪溪を登る

場所でも、観測が可能となった。氷が自分の重さに耐えかねて、あたかも水飴のように流れ始める厚さは、約30mと言われている。2011年6月にアイスレーダー観測を行なったところ、カクネ里雪溪

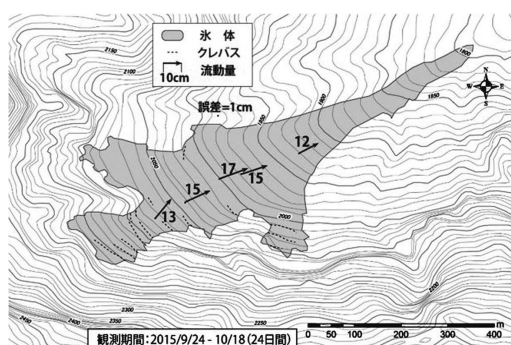


図1 氷体の流動観測結果

の水体は厚さ40 m以上、長さ700 mと、立山・剣岳の氷河に匹敵する規模であることが分かった。氷河水が流れ始めるのに十分な厚さの水体を持っていると言える。

また、氷河水の存在を実際に確かめるため、クレバス断面での水 bodies 観測を行なった(写真3)。雪渓上流部の深さ6 mのクレバスに潜り、数ヶ所から水をサンプリングし、現地にて密度観測や薄片の作成・観察を行なった。その結果、雪渓表面から1 mの深さでは、密度が700〜780 kg/m³で積雪中の気泡がつながっていて、氷河水ではなくフィロン(長く残り硬くなった雪。氷化はしていない)であったが、深さ16 mでは、密度が820 kg/m³を超え、気泡が独立していて氷河水であることが確認された。

氷河の流動観測としては、9月24日にアイスドリルで雪渓表面の積雪を貫通して氷体に達するまで穴を開け、長さ4・6 mのポールを5本挿入して、その位置を測量用の高精度GPSで測定した(写真4)。10月18日にポールの位置を再びGPSで測定し、ポールの動いた量から氷体の流動量を求めた。

観測の結果、雪渓の中流部では24日間で15〜17 cm、上流部と下流部では12〜13 cmと、水平方向の流動



写真4 GPSによる氷体の流動観測

が観測された。流動方向は東北東で、雪渓の最大傾斜方向と一致している(図1)。

観測を行なった秋の時期は融雪末期にあたり、雪渓の厚さが1年で最も薄く、流動速度が1年で最も遅い時期にあたる。このため、カクネ里雪渓は、1年を通じて連続して流動する氷河である可能性が大変高いと考えられる。

*

五百澤氏の調査から60年あまりの時を経て、ヴェールに包まれたカクネ里雪渓の課題がようやく紐解かれようとしている。

(鹿島槍ヶ岳カクネ里雪渓(氷河)学術調査団)



写真3 クレバス断面での氷河水調査

【引用文献】

今西錦司 1933…『日本アルプスの雪線』『山岳』第28年、193(282)。

今西錦司・吉良竜夫 1983…

「対談 氷河時代と人類」『季刊大林』No.15 特集「氷河」23〜30。

五百澤智也 1978…『鹿島槍ヶ岳』『鳥瞰図譜』日本アルプス、講談社、97〜112。

福井幸太郎・飯田肇 2012…

「飛驒山脈、立山・剣山域の3つの多年性雪渓の氷厚と流動―日本に現存する氷河の可能性について―」『雪氷』74(3)号、213〜222。

福井幸太郎・飯田肇、カクネ里雪渓学術調査団 2016…『鹿島槍ヶ岳カクネ里雪渓の氷体の流動』『2016年度日

本地理学会春季学術大会発表要旨集』、818。
市立大町山岳博物館
2016…『鹿島槍ヶ岳カクネ里 氷河への道のり』、2016年企画展解説

REPORT

ゴジュンバ氷河の「氷河池に登る」

大森弘一郎

昨春秋、クーンブ・ヒマラヤのゴジュンバ氷河で、以下のような「池に登る」登山をしてきたというご報告です。今まで会報でお知らせや報告をしてきましたが、全体をまとめて報告いたします。詳しいことは、当会の機関誌『山岳』第百十二年(6月下旬刊行予定)をご覧ください。

「日本山岳会創立110周年記念学術調査隊」という立派な名前をもらって実施してきました。助成金をいただき、会員の皆様からのご寄付をいただき、約半分を助成金と寄付金でやらせていただきました。総額約300万円の活動となりました。総額約300万円の活動となりましたが、ご寄付をくださった皆様に篤くお礼申し上げます。やるべきことが実施できました。

この計画は、2015年の夏に日本山岳会の創立記念事業として決まったもので、秋から隊員公募を行ない、12月に説明会をし、2016年の春に実行する予定で進めておりました。ところが、実行の直前に私が病を得て秋に延期、

記念事業にふさわしい計画に中身を変更して、昨秋、実施したものです。

ルクラからの空撮と、現地へのトレッキングと現地調査です。メンバーは大森弘一郎、ジンジン・シェルパ、ガネツシュ・ライ、野本勇(サポーター隊)、岡内完治(フライト隊)です。

*

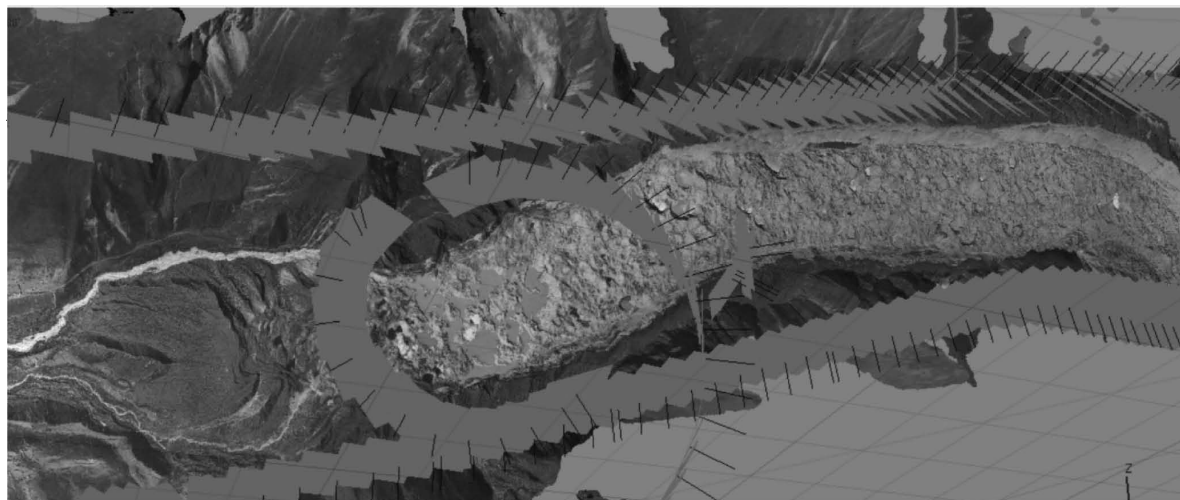
「遠征」と言えば普通は「頂上」を目指すものですが、この遠征は、山から流れ下る氷河が消える所、つまりターミナル・モレーンの変化を調べ、氷河が解けてできる池を調べて地球温暖化への指標とし、氷河湖決壊洪水(GLOF)発生の予防への知見を得ようというものでした。すなわち、池の変化が私たちの目指す「頂上」だったので。氷河の変化は時としてGLOFを引き起こします。2015年のネパール大地震では無事でしたが、もし氷河湖決壊が起きると、湖全部の水が流れ下ります。幅1km、長さ1km、高さ1000mの1億tも

の水が短時間に流れると、下流で川幅が広がり、津波のように多数の集落や住民に被害を及ぼすことになるのです。

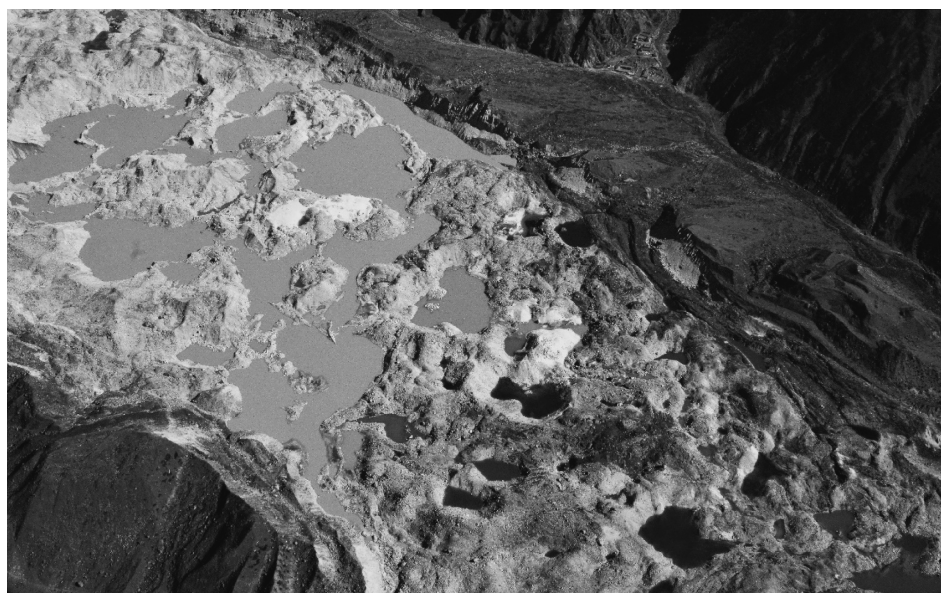
約2時間のヘリコプターによる空撮では2万枚の写真を書し、ゴジュンバ氷河の細部まで200GBの情報で記録することができました。また、そのほかにチョー・オユーの下部、ギャチュン・カンやヌプツェの南側の氷河バルンツェやアマ・ダブラム周辺の氷河などの現在を記録することができました。

この200GBの記録資料は無償で公開します。氷河研究にお使いになりたい方はお知らせください。

空撮が終わった後に、ゴジュンバ氷河への8日間のトレッキングと、8日間の現地調査です。4700mの現地での



飛行コースから写した300枚の写真と、これをフォトスキャンのソフトで処理した氷河の全景



300枚の中の1枚に写っている目的の池の姿



池にボートを浮かべての測深

活動には高度順化が不可欠ですの
で、順化には留意し、ルクラから
氷河までに時間を掛けました。歩
く速度は常に「ビスタリ」(ネパ
ール語で「ゆつくり」)を心掛け、とも
かく現地での調査活動を優先しま

した。
その行動の概略は以下のとおり
です。
10月12日羽田発、13日～15日カ
トマンズ、16日ヘリでルクラへ、17
日～18日朝空撮フライト、18日ル

クラ発、21日クワンデ・ピーク往
復、22日クムジュン発、25日ドラ
ナグ着、26日～29日池測定、30日
パンガに移動、31日落ち口調査。
11月1日撤収、5日ルクラ着、9
日朝羽田着。

氷河池にゴムボートを浮かべて、
5つの池の387ヶ所の水深を測
りました。空撮した池の形の上に
その測定による図を重ねると、池
の状況がよく分かります。すでに
氷結が始まっていたために、水深
測定は半分ぐらいしかできません
でしたが、ターミナルの状況は概
略分かりました。氷河池から流出
する水の量も測れましたし、流出
口の形状も流速も測れました。

ボートでの氷河池の測定、流出
口の測定、流速を測る面白い方法、
氷河の融け水の状況など、興味深
い経験をしました。

氷河の減少量は約2000万m³
／年、池の貯水量は約500万m³、
流速約10m³／秒など、興味深い数
値を得ております。

これから何を考え、何をする
か。帰国後も空撮資料とデータを
眺めながら、氷河の変化のことを
考えております。一緒に考えてく
ださる方は、ぜひお付き合いくだ
さい。

これが今回の学術調査隊の「登
頂」結果です。

(日本山岳会創立110周年記念
学術調査隊)

TOPICS

ナンダ・コート初登頂のテント、80年目の発見

大蔵喜福

昨年の「マナスル初登頂60周年」で、記録映画を再編集した毎日映画社は、映像制作とともに過去の登山映像記録を多数保管・管理しているが、私が代表幹事を務める安全登山啓蒙サイト「サンガク」の主管をしてもらっている会社でもある。

サイトにはアーカイブ映像のコンテンツがあり、戦前の映像をというプランが持ち上がり、残されている映像を探すうちに「1936(昭和11)年、立教大学ヒマラヤ踏査隊ナンダ・コート」という簡易DVD行き当たった。すでにフィルムは廃棄されていたが、隊長・堀田彌一、隊員・山懸一雄、湯淺巖、濱野正男に特派員・竹節作太、アンツェリンほかシェルパ2名の登山隊で、インド、ガルワール・ヒマラヤの未踏峰ナンダ・コート(6867m)の初登頂に成功した映像であった。

マナスルよりさらに20年も遡った時代に、日本人初のヒマラヤ登

山という偉業があったことは、登山史上で一応知ってはいたが、その内容に興味を覚えなかった。しかし、映像を目の当たりにすると引き込まれた。

画像は荒れ音声は途切れるが、その臨場感に興奮し、時代の背景を考えると、当時よくこれだけの登山を成し遂げたものだといに感服した。それも世に出て間もない若者と学生がたったの4名で……。顔の表情などの微細はつぶれて見えないが、そのストーリーの中で、朗らかに充実した笑顔が想像できたのである。

二・二六事件で始まったきな臭い年に、自立した自由な発想でヒマラヤ登山をした事実は驚嘆に値する。尊さは未知への挑戦、初見での初登頂。資金調達も今風の一般募金で、現代で言えばクラウド・ファンディング。登山スタイルも斬新で、お互いのスキルを認め合ったチームワークが見事である。詳しい内容を知らなかったことを

恥じた。

この記録映画プリン

トは、経年劣化による

酸化現象を

起こし廃棄

処分になれ

たと聞いた

が、昨夏、改

めて調査し

たところ、

日本山岳会

の倉庫に保

管されてい

ることが分

かった。そ

こで貴重な

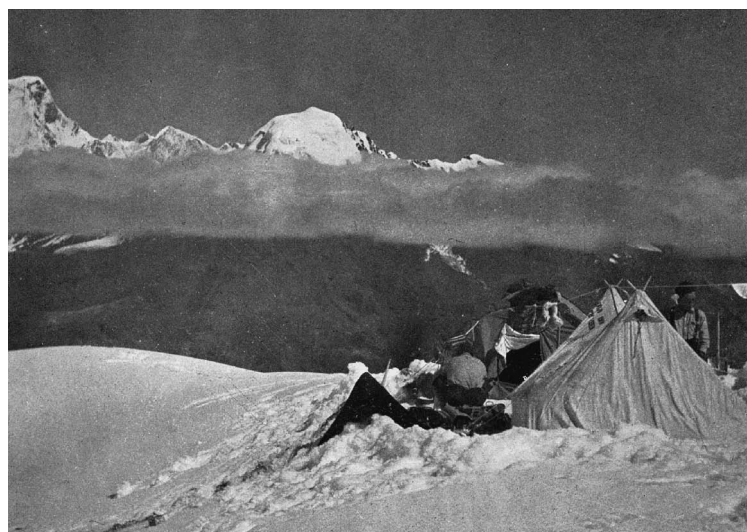


長野県山ノ内町にある竹節さんの生家で発見されたテント。
RIKKIO UNIV ALPEN VEREINの文字がくっきりと(毎日映画社提供)

鮮明な4Kにデジタルイズするプロジェクトを考えようと関係者で話し合った。同時にナンダ・コートを再登し、頂上に埋めたといわれる立大校旗、毎日社旗、日章旗を探索するプランも持ち上がった。初登頂から80年目の記念日、10月5日のことであった。

撮影者は後援した大阪毎日新聞社(東京日日新聞社と合同)の特派

員・竹節作太で、記事とともに写真と記録映画撮影の社命を受けた。11kg余りのゼンマイ駆動35mm単レンズ・アイモ撮映機は、登りながら映すには驚きの重量。一通りのレクチャーは受けたものの、帰国まで映っているかどうか本気で心配したらしい。彼は、早大のクロスカントリー・スキー選手で、日本が初参加した冬季オリンピックク



ナンダ・コートの第2キャンプ。『ナンダ・コト登攀』（竹節作太著、大阪毎日新聞社）より

「サンモリッツ大会」の50kmレースに出場している。また、剣岳・早月尾根の厳冬期初登を立天山岳部とともに成した猛者ではあるが、条件の悪い山岳撮影、しかも未経験。業務命令によぐぞ従ったものだと感じる。

そんな登山を支えた当時の国産装備は？ と新たな興味湧き、昨年11月、竹節記者の実家へ。蔵には大きな茶箱に詰められた山道

具が……。まずテント、付箋には「アタック・キャンプで使用」の文字がありびつくり。テントは三角錐型で、当時、東京・西巣鴨にあった細野商店が製造した国産。後年、「現代の名工」に選ばれた店主・細野博吉（故人）が製造したもので、極めて高い縫製技術で製作されている。これは立大隊の特注品で、その後に続く海外遠征隊で使用されるテントの原型となっている。

さらに本人のヤッケやゲートル、シュラフなど個人装備、そして詳細な記録帳と続々発見。中にはナンダ・コートからマナスルまで使い込んだ物も。保管状態も良く、ロマンあふれる大発見に驚いた。80周年を期に、この登山隊の全体像を様々な角度から捕え、再検証したいと強く思った。

「ナンダ・コートへ還れ」とは大先輩、原真さんの言葉。登山界の現状への戒めと教えが思い浮かぶ。

TOPICS

クムジュンに耐震性のある教室を再建

和田豊司

クムジュン・スクールとは

1953年にイギリスのジョン・ハント率いる登山隊のヒラリーとシェルパのテンジンがエベレストの初登頂に成功した。その後、ヒラリーは財団 (Himalayan Trust) を作り、シェルパや山間部に住む人々のために学校や病院を造り、植林を行なうなど積極的に山間民族の人々を支援した。

エベレスト街道の要所、ナムチエ・バザールのすぐ上にあるクムジュン(標高3800m)には、最初に支援した学校クムジュン(ヒラリー・スクールがある。今でもジュラルミン(アルミ合金)製の校舎があり、教室として使われている。350人ほどの生徒(幼稚園、小学校、中学校)と15人の先生が学んでおり、山奥から来ている生徒のために寮もある。

2002年には、ヒラリーが会長を務めていたHimalayan Trustの要請を受けて、同志社大学山岳会(以下、当会)が学校施設充実のための支援を行なった。

ネパール大地震の復興支援

当会のヒマラヤ登山では、すべて安全にかつ成功裏に活動がなされてきた。これはシェルパの方々の協力があつてこそその成果である。近年では、現役学生による登山隊を西ネパールへ2隊出し、初登頂に成功している。お世話になった方々への感謝の気持ちを込めて、2015年に起こったネパール大震災の復興支援に協力することになった。

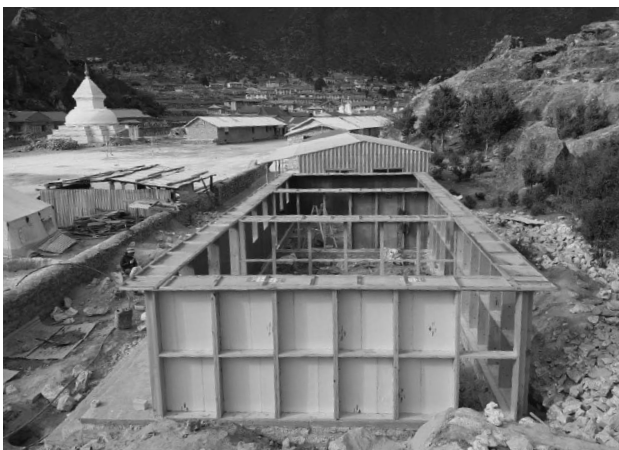
本趣旨を、建築分野で国際的な災害救援ボランティア活動を行なっている(株)坂茂建築設計事務所に提示し、協力を要請したところ快諾していただき、建築設計・監理面で支援していただいている。

支援内容

学校が被害を受けているとの情報受け、現役山岳部員のアイチエ



大地震で壊れた教室の外壁とトイレ



建設途上の教室。向こう隣に見えるのは、ヒラリーが最初に造った教室

ン峰(西ネパール、6055m)登山に合わせ、調査と緊急支援を行なった。その結果に基づき、少なくとも教育施設は耐震性のある建物にすべきであると考え、今回の支援に至った。その内容は、耐震性のある校舎(3教室)を新規建設する。
建物・平屋建て、85・8㎡。
建設地・ソロクンブ地方クムジュン。ヒラリーが建てた教室の南側。
設計面での配慮・極力現地調達可能な材料を使う。景観に配慮。

断熱構造。耐震性のある建築設計手法が現地に普及できる。
予算・直接経費800万円。

今年3月に竣工予定

現役・OB・設計事務所が現地を数回訪問し調査するとともに、旧校舎の解体などの作業に参加してきた。現在、校舎はほぼ完成し、2017年3月13日、現地で竣工式を行なう予定である。

(同志社大学山岳会 Knumjung School Project 担当)

REPORT

第11回ピオレドール・アジアは 韓国・ガンガブルナ隊と日本・黒部ゴール デン・ピラー隊が受賞

萩原浩司

その年の最も優れたアルパイン・クライミングの記録を顕彰するピオレドール(金のピッケル)賞。クライミング界のアカデミー賞とも称される同賞のアジア版「ピオレドール・アジア」の審査会が2016年11月4日、韓国のソウ

ル市で開催された。

今回ノミネートされた登山隊は、ガンガブルナ南壁に新ルートを拓いた韓国隊、マナスルの速攻登山などを記録した香港の曾志成、そして日本から推薦された「黒部ゴールデン・ピラー」の3隊。ヒマラ

ヤでもアラスカでもない、日本国内の記録が候補に挙げられたのは、今回が初めてのことである。

審査結果を発表する萩原と、ミネートされたクライマーたち

黒部ゴールデン・ピラーとは、剣沢大滝右岸にそびえる高さ380mの岩壁で、スパンティークのゴールデン・ピラーを登った佐藤裕介によって命名された。佐藤は2016年2月3日、伊藤仰二、宮城公博とともに鹿島槍ヶ岳に入山。黒部川を横断し剣岳を越える32日間の行程の中で、黒部

ゴールデン・ピラーの初登攀に成功した。全11ピッチのうち9ピッチにハンギング・ビレイが強いられるという、極めて急峻な壁であった。

審査は韓国の『人と山』、中国の『山野』、日本の『ROCK&SNOW』と、それぞれの国の雑誌編集長に、韓国在住のアルピニストを加えた11人の審査委員によって行なわれた。前年に引き続き、審査委員長は「ピオレドール」の審査経験のある萩原が担当。各登山隊のプレゼンテーションのちに、1時間を超える意見交換を経て、韓国隊と日本隊のピオレドール・アジア

ア授賞が決定した。日本隊の記録に対する評価は意見が分かれたが、世界的にも稀な豪雪地帯の最も厳しい時期に、周到な準備を重ねて未知の壁に挑んだ開拓精神を評価しての授賞となった。

また、登山界の発展に広く貢献した者に対して贈られる生涯功労賞は、日本からの推薦を受けた中村保氏が受賞した。長年にわたる「ヒマラヤの東」エリアの探査、研究、発表によって世界中のアルピニストの目を開かせ、さらに山岳地図帳の出版によってこれらの山々を身近なものにしてくれた功績は大きい。



剣沢大滝右岸にそびえる黒部ゴールデンピラー(写真中央のシャドー部)と剣岳

FUND

若者の冒険を支援、「谷口けい冒険基金」設立

柏 澄子

2015年12月21日、北海道の大雪山系にある黒岳(1984m)で滑落死した登山家の谷口けいさん(享年43)。彼女の遺志を継ぐ「谷口けい冒険基金」が設立された。

きっかけは、彼女の死後、父である谷口尚武さんが、娘がコッコツと貯金をしていたのを知ったことにある。娘が苦心して貯めたであろうお金を、有意義に使いたいと考え、尚武さんは登山家の野口健さんに相談した。

野口さんといきさんは、2002年のエベレスト登山をともにしたところから付き合いが始まった。けいさんが、野口さんのエベレスト清掃登山のベースキャンプ・マネージャーを務めたのだ。翌年は、エベレストのC3(7300m)まで一緒に登り、清掃をした。06年のマナスル清掃登山隊にも登攀隊長として参加。07年には、野口さんとともにチベット側からチョモランマに登頂した。以後も、ネパールや日本国内で様々な登山やイベントをともにしてきた。

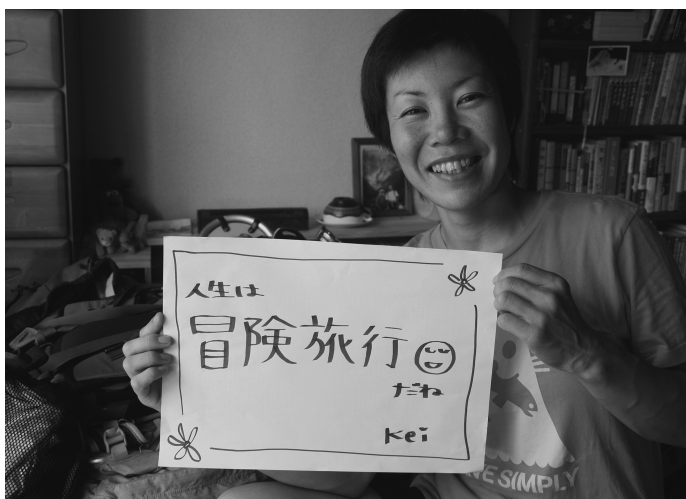
当初、尚武さんはけいさんが毎年のように通い、大好きだった国、ネパールの震災復興に寄付したいと相談を持ち掛けた。野口さんが主宰するNPO法人ピーク・エイドでは、「ヒマラヤ大震災基金」も運営していたからだ。しかし、相談を受けた野口さんは、「けいさんはよく考える人。何がしかの目的を持って貯めていたに違いない。彼女の考えを少しでも活かせる使い方をしたい」と考えた。

そのときに思い至ったのが、若者の冒険を支援することだった。生前けいさんは、登山を通じて世界各地を旅していた。ヒマラヤの高峰を登ることや氷雪壁を登攀することにも意欲的だったが、同時に山に至るまでの旅も楽しんでいった。そのなかで「どこに行っても、日本の若者の姿が少ない。若い人たちは冒険しなくなってしまうのか」と残念がっていた。彼女自身、高校卒業後すぐに自活するようになり、自転車や登山、アドベンチャー・レースなどを通じて世界

各地を旅して歩いた。「けいも若いころ、資金集めに苦しんだはずだ。だったら、意気込みのある若い人たちを支援したい」と尚武さんも野口さんの考えに賛同した。

「40歳まではたくさん経験して吸収する人生。それ以降は還元する人生」と、かつてけいさんは語っていた。まだまだ自身の冒険も登山もやりたいことがたくさんあったが、それと同時に、若いクライマーを育てること、若い人たちに登山を教えることにも意欲を見せていた。国立登山研修所の講師を務め、大学山岳部員を指導したり、「日本山岳会学生部女子ムスタン登山隊2014」の引率もした。

「実績は問わない。意欲のある若者に冒険をしてもらいたい」と尚武さんは、かつて資金繰りに苦しみなながらも若いころから探求心や好奇心あふれる登山や旅を繰り返ししてきた娘を思い起こし、語った。発起人には野口さんのほか、三



「人生は冒険旅行だね」がけいさんのモットー(写真＝平出和也)

浦雄一郎さん、今井通子さん、夢枕獯さん、近藤謙司さん、田中正人さん、寺嶋郁夫さん、花谷泰広さんが名を連ねた。「自然、チャレンジ、限界、未知」をキーワードとした冒険を計画する若者を対象に、1件につき30万円を支援する。また、基金はけいさんの貯金を元にスタートするが、寄付も受け付けている。詳細はホームページを参照していただきたい。

<http://keifund.net/>

活動報告

日本山岳会の各委員会、同好会の活動報告です。

アルパインフォトクラブ— 第24回写真展「心に映る山々」

2016年度の写真展は昨年11月24～30日、今回も四谷のポートレートギャラリーで開催された。出展数は40点、来場者は600名ほどであった。昨年と比べるとデジタル写真は全体の60%と昨年より増加したが、当クラブではフィルムでの撮影も未だに健闘している。

山の麓から撮られた写真は、日本の四季の風景と愛らしい花々が美しく彩りを添えている。また、厳しい頂の山岳写真に癒しの効果を感じられた、と来場者の声が聞かれた。「二期一会」の出会いの風景を大切に切り取った写真の数々は、「心に残る山岳風景」としてご覧いただけたと思っている。

「1956年日本山岳会マナスル



写真展に携わったアルパインフォトクラブのメンバー

初登頂60周年」の記念すべき話題の多かった昨年、案内葉書の写真は、「マナスル爽快」(竹花晃会員作品)を採用した。年次晩餐会でもこの写真が展示され、好評だった。16年も前年度作品は全国巡回展の最後として「高尾599ミュージアム」で10月8～10日に展示され、1000人余の来場者に見て

いただいた。「茜さす」(川嶋代表作品)の冬至に撮られた富士山の、茜色に染まった美しい写真に「わー、きれい」「高尾山頂から撮った写真よー」と関心が高く、地元の人として紹介できたように思った。家族連れ・山ガール・若いハイカーの山への憧れと写真との対話のなかに、感動も与えられたことだろう。いつもの写真展では見られない会場の華やかさがあった。わずか3日間であったが、地域への

支部

だより

北海道支部

千島に夢を馳せて— 千島列島勉強会

司会者の「千島プランがただ今スタートしました!」との発声で千島列島勉強会が始まった。オホーツク海を取り囲む生態系観察登山も、第3段階として千島列島の山々を目指してスタートした瞬間

である。

北海道支部創立50周年事業のオホーツク分水嶺踏査は、350kmを走破して知床岬に達して完了したが、分水嶺はそこで終わらず千島列島へと延び、さらにはカムチャツカ半島へと続いているため、思いは継続していた。

また、知床半島の豊かな自然生態系はオホーツク海や周辺の自然

貢献とクラブ会員として作品を見ていただける喜びを感じた。

山の写真大好きが集まり、当クラブにも「新しい風を吹き込む」ことが必要だ。会員を募集しているの、ぜひ問合せいただきたい。

今回の作品は例年どおり各地を巡回し、17年秋には高尾599ミュージアムで最後の展示がされる。各地の会場にお出掛け下さい(会場・会期は後日ご連絡します)。

(茂出木協子)

全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとレポートします。

環境の影響を受けていることから、環オホーツク圏の生態系観察登山へと発展し、第1弾として2016年7月に、ロシア沿海地方のシホテアリニ山脈オブラチナヤ山で生態系観察登山を実施。翌年にはカムチャツカ半島のアバチャ山生態系観察登山へ。これに続く第3弾として千島列島の山々の生態系観察登山へと進んだ。

千島列島の植生の調査研究を目指している北海道大学植物研究チームと意見交換する中で、双方の目的である千島列島への上陸が合致し、生態系観察登山の実現に向けて連携を深めながら調査研究を進めることになり、2月1日、札幌エルプラザの研修室に北海道大学の教授4名と支部会員15名が集まりスタートの勉強会が行なわれた。

最初に西山支部長から千島列島に夢を馳せた熱い思いの挨拶と趣旨説明があり、話題提供として北海道大学総合博物館の高橋英樹教授から「千島列島の植物」の講演をいただいた。高橋教授は、植物の植生分類などの調査のため1995～2000年と2009～2015年の2回にわたりロシア・アメリカ・日本の合同で調査船によ

り全島に上陸した。千島の維管束植物を全地域にわたって現地調査した、ほぼ唯一の現役日本人研究者である。日本と千島の植物区系区や植生帯、千島列島フロラ研究史および植物が大陸から移動する専門的な話から進められた。

千島列島は、北・中部・南の3つに分けられるが、人が住んでいるのは北と南の島々で、中部の島は無人である。樹木は南の択捉島までで、その先には高木は見られないことから日本人研究者の宮部線がある。面積のわりに植物種が多く森林(高木林)は未発達である。外来植物は千島にもあり駆除したい。などなど難しいところもあったが興味深いものであった。

参加していただいた北方圏フィールド科学センターの3名の教授にも自己紹介と一言コメントをいただいた後に意見交換に移った。

活発な質疑や意見に時間オーバーしたが、中でも無人の島々ばかりの中部千島が興味を湧くとし、チシマフウロは雑草のごとく咲いていることや、シムシル島に咲くチシマヒナゲシの情報にため息が漏れ、ウルップ島や松輪島などに高い山もそびえている話に歓声が

上がるなど、時間を忘れての勉強会は有意義に終った。

この後、場所を変えての懇談会は、千島に夢を馳せてのタイトルどおりに一層盛り上がったことは言うまでもない。次回は千島列島の地質および火山についての勉強会を予定している。(京極紘一)

東京多摩支部

南関東ブロック

3支部合同懇親会

昨年10月29(土)～30(日)、初めての南関東ブロック3支部合同懇親会が開催された。南関東ブロックが本部の指導により組織されたのは、神奈川支部ができる前の一昨年9月の支部合同連絡会議のことだ。それまで、3支部合同懇親山行は雲取山を分け合う山梨支部、埼玉支部、東京多摩支部の3支部で4回開催されたが、今回は4月に神奈川支部ができ、山梨支部が外れて南関東ブロック3支部の合同懇親山行に模様替えになった初めての懇親山行である。

これまでの3支部懇親山行は天候に恵まれず、いつも大雨や雪などで延期、登山中止が続いた。今

回の御岳山御師の宿「山楽荘」に宿泊して大岳山に登る企画は、3年前に東京多摩支部が同様の企画で主管開催したところ大雨となり、青梅線が止まるのではないかとの懸念から講演会・懇親会だけで、登山は中止となったことへのリベンジとして計画された。

今土曜日は晴れ、日曜日は曇りとの天気予報で、参加者は集合時間の午後1時30分を目指して三々五々宿泊先の山楽荘に集まった。経路は様々であったが、42名が時間どおりに集まった。

1日目のイベントは昼の神崎忠男氏の講演と夜の懇親会である。2時に全員が大きな神棚のある広間に集まった。まずは、東京多摩支部竹中支部長、埼玉支部松本支部長、神奈川支部込田支部長の順で開会の挨拶があった。これからの南関東ブロックの発展、協力関係、これまでの懇親山行の天候の話などが語られた。

続いて、山楽荘の先代主人・片桐氏から御岳神社、御師の仕事、大黒様・恵比寿様の陰陽、神道などについて興味あるお話を聞かせていただいた。終わりに、魔法の言葉「私は若い、私は元氣、私は美

人」を毎朝唱えるとそのとおりになると聞かされ、全員大声で唱和した。

休憩を挟んで、神崎忠男・前日本山岳協会会長の講演〈私の見た日本山岳会の歴史〉となった。「日本山岳会としては、今年登頂60周年を迎えたマナスル登山を忘れてはならない。日本山岳会の歴史を知らない人が会の組織の中にも増えてきている」と語り始めた。また、最近のスポーツ・クライミングの隆盛は時代の流れであり、オリンピック種目にも取り上げられたことでさらに注目されている、として20分ほどのスポーツ・クライミングのムービー映像を披露した。今後の登山界は、スポーツ・クライミングは登山ではない、などと言っておられない状況になっているという。

話は37ページにわたる講演会資料に基づき、日本山岳会の歴史に戻って歴代の会長、事務所の変遷、自らの山岳会での活動を語った。70年のエベレスト登頂後の乱闘秘話、7000m付近で滑落した話など、当時の隊員しか知り得ない裏話も面白おかしく話された。

続いて、「日本の登山界と時代」

として、日本山岳会が中心となつて日本山岳協会を立ち上げたこと、その日本山岳協会を支えるために東京都山岳連盟に加入したことなどに言及され、時代に合った登山の普及・振興、登山界の体制作りが必要であることを強調された。

最後に、質問に答えて韓国の若年層の活発な登山事情、スポーツ・クライミングへの日本山岳協会の取組みなどについて語っていたが、終了した。

第2部の懇親会は森前会長の発声で乾杯を行ない、宴会が始まった。東京多摩支部から奥多摩BCの案内PR、埼玉支部から12月に行なわれる講演会のPRなどがあり、今後は3支部でのイベントなどの情報交換を積極的に行ない、会員同士の交流を活発に進めることが話し合われた。

宴もたけなわのころ、神崎氏の歌唱指導により山の歌を声高く唄って明日の山行への英気を養い、最後は多摩の「七つ締め」で中締めとなった。

2日目、29名が3班に分かれて大岳山登山に出发した。予定の時間を少しオーバーして山頂に到着。残念ながら展望はない。3班全員

がそろったところで記念写真撮影。ここから下山はのんびり長尾平まで上の道を行き、御岳神社付近で流れ解散となる。次回は神奈川支部の主管開催となる。どこで集まるか楽しみである。

(山本憲二)

神奈川支部

第1回神奈川・静岡支部合同山行を箱根で実施

平成28年11月19、20日の両日、第1回となる神奈川・静岡支部合同山行を箱根にて行なった。霧にむせぶ仙石原高原の神奈川大学保養所に集まったのは静岡支部より13名、神奈川支部より17名、本部や千葉支部より3名、総計33名の山の仲間たちである。3月の神奈川支部設立記念パーティにおいて静岡支部・大島支部長よりお声掛けをいただいて実現した。

まず神奈川大学山岳部監督である落合会員より講演をいただいた。廃部寸前の危機的状況から立ち上がり、OBが最新の登山技術を学び直してスキルを蓄積し、7大陸最高峰への挑戦を成功させ、日本でも有数の活動的な山岳部を作り

Climbing&Medicine・76

漢方薬は登山にも役立つ

大野秀樹

漢方薬を使用する医師の割合は約90%である。また、すべての医学部・医科大学で漢方薬の講義が実施されているように、すっかり市民権を得てきた。一般に、漢方薬は複数の生薬を組み合わせた方剤(調合された薬)を指す。それぞれの生薬が多くの有効成分を含んでいるため、西洋薬のように症状をピンポイントで抑えるのではなく、複雑多彩な症状に効果を発揮し、その結果、病気に対する抵抗力を高める。そのため、漢方薬と西洋薬は、それぞれの長所を活かして使い分けることが重要である。こんな漢方薬を登山で利用しない手はない。

急性高山病 高山病の予防、治療にしばしば利用されるダイアモックス(一般名・アセタゾラミド)は、利尿作用を有する。血液濃縮が起き、水分補給が困難な高所での利尿剤の使用は望ましくない。一方、柴苓湯(114)は小柴胡湯(9)と五苓散(17)の合剤であり、後者は軽度利尿作用を持つが、脱水のときには水分をキープするユニークな性質があり、主に水分循環を改善する。こうして、二日酔いにも効果がある。さらに、前者の成分である柴胡にはステロイド様の作用がある。ステロイドは高山病治療の切り札のひとつであり、体液を調整する五苓散と一緒に使った柴苓湯を高山病対策の第一選択薬として推奨したい。実際、前日からの服用で、効果例が数多く報告されている。そのほか、五苓散単独や、成分が似ている真武湯(30)にも有効例が少なくない。

なお、過去のコラムは次の手順でご覧になれます。ご活用ください。

日本山岳会ホームページ→日本山岳会の活動案内→委員会→医療委員会 <http://jac.or.jp/info/iinkai/iinkai.html>



漢方薬は山中での疲労や高山病などにも有効

こむら返り ほとんどの漢方薬は主として慢性効果を示すが、こむら返りに著効する芍薬甘草湯(68)の急性効果は、全漢方薬中トップクラスだ。多くは服用後5～10分以内に手品のように効果を発揮し、どの西洋薬よりも優れている。芍薬と甘草に含まれる成分が神経筋シナプスのアセチルコリン受容体に相乗作用し、筋弛緩作用を発現する。

疲労感 補剤は消化機能や免疫能を賦活し、体の機能を高めて元気にくれる漢方薬であり、西洋薬には見られない。補中益気湯(41)がファーストチョイスで、効果がなければ十全大補湯(48)、消化器症状を伴っていれば六君子湯(43)がお薦めである。

各数字はツムラ漢方薬の番号を示し、大部分はほかのメーカーのものと重複する。漢方薬は、「証」(各人の体力・体質・症状など)に基づいた相性が重要であり、違和感を感じたり、効果が少しも見られない場合には、躊躇なく服用を中止して構わない。鍼灸が高山病に有効という報告もあり、漢方薬を中心に東洋医学がさらに登山に応用されることを期待したい。

上げるまでの軌跡をお話したい。続いて行なわれた懇親会では、両支部長の挨拶の後、山の話に花が咲いた。会員より地酒や果物の差し入れ多数をいただき、皆大いに盛り上がった。その後も場所を移して交流は続き、夜が更けるころには、皆長年の友人のように打ち解けていた。

翌日は前日とは打って変わって快晴に恵まれ、爽快な山行日となった。仙石原より矢倉沢峠を通り金時山に登頂。長尾山、乙女峠經由で仙石原に下山した。箱根の外輪山も青空に映え、風にそよぐ仙石原のススキや芦ノ湖の湖水も望見できた。富士山もときおり雲間から顔を見せてくれた。金時山頂はたくさん登山者で立錫の余地もなく、記念写真のみとして長尾山へ移動し、ここで昼食とした。食事を楽しみながら来年の合同山行や南アルプス最深部の探索行など今後の交流計画について話し合った。楽しい時間は瞬く間に過ぎて仙石原高原に帰着、再会を約して帰途についた。

(植木貞一郎)

宮崎支部

家庭裁判所委託登山で
功労感謝状を受賞

宮崎支部が公益的活動として実施している家庭裁判所短期補導委託登山は、2002(平成14)年4月8日に第1回の補導委託を受けて以降、2016年11月の実施で第20回を迎えた。

家庭裁判所からの委託は年に1〜2回ほどで、毎回2〜3名の少年が参加する。支部ではこれまでに延べ64名の少年たちの「少年登山」をサポートしてきた。

登山する山は宮崎近郊に座る双石山(509m)である。九州地方に残在する貴重な自然林として1969(昭和44)年に国の天然記念物に指定され、多くの岳人に親しまれている、変化に富む自然豊かな山である。

登山では、少年たちに加えて家庭裁判所調査官、少年友の会会員、保護者などが参加する。支部会員は十数人で役割を決めて登山をサポートしていくが、奇岩と急峻な岩場の尾根を声を掛け合い、助け合いながら慎重に登り、また変化していく植生を愛で、山容に圧倒

されつつ山頂を目指してゴールへと導いていく。

少年たちとは1日だけの短い時間ではあるが、非日常的な「登山」を通じて、やり遂げるといふ根気と達成感、人を思いやる心を養い、自然とのつながりを学ぶ。このことは少年たちの自信溢れる、晴れ晴れとした笑顔に現れていて、それは将来への希望となって続くと感じさせる。我々は毎回少年たちと行動をとるたびに、この委託登山の意義深さを痛感させられるのである。

このような取り組みは全国的にも珍しく、裁判所内部において高く評価され、その功労が認められて福岡高等裁判所長官より感謝状を授与されることとなった。平成29年2月1日、宮崎地方裁判所所長室において感謝状の授賞式が行われた。

(末永軍朗)



とやま 山と人

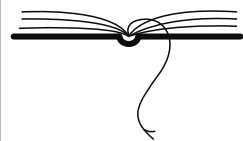
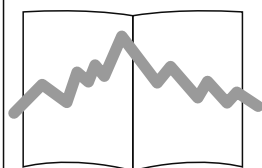
佐伯邦夫著



2016年12月
北日本新聞社刊
四六判 209頁
1500円+税

これまで多くの山行記や写真集を出してきた魚津市在住の著者が、昨年暮れに地元の北日本新聞社から刊行したエッセイ集。長年教職のかたわら登山、山野スキーの実践・啓蒙と山岳書の執筆を続けてきたが、2000年に難病の拡張型心筋症を宣告されて、66歳で登山も山岳写真も止めざるを得なくなる。数年前からフェイスブック(FB)を始め、「923(クニさん)の山はなし」というタイトルで精力的に書き続けてきた。毎回話の最後に添付される1枚の写真が、また魅力的ではあった。そのFB

図書紹介



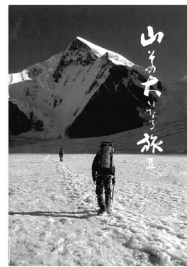
上に書きためた文章の中から「半生をかけて親しんだこの辺のやま、あるいはそこを歩いた先人たちのことなど」を選び出して一書としたもの。

さて内容は第一章僧ヶ岳・毛勝三山、第二章立山・剣岳、第三章「たちやま」と人、の3章に分かれ各章に6編が収められている。第一章は著者のホームグラウンドでもあった僧ヶ岳と毛勝三山に果敢に挑んだ先人たちの物語である。吉澤庄作の僧ヶ岳初登山と15年後の布施谷からの登山記録は日本山岳会の会報や『山岳』に発表されたが、100年以上前の道なき道を行く両登山記を読み解く。陸地測量部の古田盛作による毛勝山での三角点測量では、「点の記」から当時の想像を絶する苛酷な作業を解説する。富山出身の田部重治が登山家人生の初期に登った毛勝山登

頂記は興味深い。第二章では江戸時代の登山記として『立山遊記』(校訂者の正橋剛二は元日本山岳会(会員))により当時の立山登山を紹介。剣岳となると著者の独壇場で、映画『剣岳・点の記』で一躍名が知られた宇治長次郎や佐伯平蔵など、剣岳の地名として名を残す立山ガイドを紹介。「剣岳に魅せられたとやま人」では日本山岳会の会員が次々登場する(石崎光瑤、石黒清蔵、藤平正夫など)。第三章では「黒部からヒマラヤへ」として立教大学ナンダコット登山隊長の堀田弥一(昨年、ヒマラヤ初登頂80周年記念として当時の映画の上映会が富山市で開催)について、富山県人でも知らない逸話が紹介される。また、冠松次郎が戦時中食料無心をしたためたという手紙(日本山岳会蔵)や、本部事務局に勤めていた塚本繁松の名前が出てきたりする。

本書の帯には「923先生の山の教科書」とあるが、「面白くてためになる、発見の喜び」を味わえる本として日本山岳会会員の皆さんにも一読を勧めたい。なお、2月にはFBの中の923さんの山行記録を集めた『追憶の山々』が、姉

同志社大学山岳部・山岳会編 山その大なる旅Ⅱ 同志社大学山岳部創部90 周年記念誌



2016年11月
同志社大学山岳部
A4判 243頁
非売品

妹編として山と溪谷社から刊行された(文中敬称略)。(山田信明)

同志社大学山岳部・山岳会が創部80年から90年の間、10年間の活動をまとめた記念誌である。記念誌というより西ネパール(チベットを含む)特集号と言っても過言ではない。同志社大学山岳会のアプリ、サイバルから続くこの地域へのこだわりが五十余年受け継がれている。

クビカンリ(6721m)、チャンラ(6563m)、アイチエン(6055m)の3つの登山隊に共通して言えることは、現役学生が主体になっていることである。大学山岳部の衰退が著しくなっている中でこれだけの活動が継続できる

のは、大学やOB会の強力なバックアップがあつての成果である。

西ネパールでは登山者やトレッカーが少なく、山そのものがあまり知られていない。それゆえに山に近づくキャラバンも登山活動として楽しめる様子が記録によく表れている。クビカンリではチベット側からのアプローチである。ネパール側からのアプローチと比較すると、その容易さが分かる。

また、10年間の学生の活動がコンパクトにまとめられているとともに、氷河衰退調査、河口慧海の越境後のルート、雪男(?)発見騒動、個人の登攀記録など広範囲に及んでおり、充実した内容になっている。

(和田豊司)

*『山その大なる旅』および本書は、在庫がある限り郵送料のみで送付できます。申込みは、

toyoi@kit.h-noue.jp



図書受入報告(2017年1月)

編著者	書名	頁/サイズ	発行者	発行年	寄贈/購入別
富永滋	奥秩父・奥多摩の古林道	514p/21cm	デザインエッグ	2016	著者寄贈
安間繁樹(文) 岡本泰子(絵)	動物がすぎ!イリオモテヤマネコをとらしてみえたこと	33p/31cm	福音館書店	2017	著者寄贈
みず森ひろ史	まほろばの山と高原 続	248p/19cm	白山書房	2016	出版社寄贈
神長幹雄・小泉弘(編)	山を愛し続けた田部井淳子さん、77年の生涯	48p/26cm	田部井淳子さんを送る会	2016	発行者寄贈
田部井淳子	再発!それでもわたしは山に登る	224p/19cm	文藝春秋	2016	田部井政伸氏寄贈
米川正利	母がつくった山小屋 : 黒百合ヒュッテ60年	106p/19cm	山と溪谷社	2016	出版社寄贈
池田常道(編)	岩と雪 : ベストセレクション 1958-1995	334p/26cm	山と溪谷社	2017	出版社寄贈
田中康弘	山怪(弐) : 山人が語る不思議な話	256p/19cm	山と溪谷社	2017	出版社寄贈
Brown, Kester (ed.)	New Zealand Alpine Journal 2016 (Vol.68)	404p/24cm	New Zealand Alpine Club	2016	発行者寄贈



■1月の理事会は休会でした

ルーム日誌 1月

6日	自然保護委員会
10日	山岳研究所運営委員会 スケッチクラブ
11日	山行委員会 フォトクラブ 山想倶楽部
12日	常務理事会 山岳地理クラブ 九五会
13日	図書委員会 スキークラブ
16日	総務委員会 資料映像委員会 スケッチクラブ
17日	スキークラブ
18日	青年部 三水会 つくも会
19日	公益法人運営委員会 YOUTH CLUB みちのり山の会
20日	再生委員会 「山の日」事業委員会
21日	YOUTH CLUB 山の自然学研究会

23日	支部事業委員会 青年部 フォトクラブ
24日	デジタルメディア委員会 遭難対策委員会 フォトクラブ
25日	自然保護委員会 麗山会
26日	学生部 山遊会
30日	YOUTH CLUB
31日	YOUTH CLUB 1月来室者 363名
会員異動	
物故	
後藤又兵衛	(3170) 17・1・22
松田 章	(7134) 16・12・16
石井貞男	(9064) 16・12・31
退会	
山口 孝	(12841) 東海
石松欽一	(12927) 福岡
本多博哉	(13455) 首都圏
小宮真理	(14002) 東京多摩
小倉雅之	(14056) 神奈川
佐々木秀雄	(15064) 福島
坂田美和子	(15856) 東京多摩



◆『木の目草の芽』126号を発行

自然保護委員会

自然保護委員会機関紙『木の目草の芽』126号を発行しました。今号は、宮城支部自然保護委員長の柴崎徹氏による「会長特別表彰を受けて」、櫛田勁氏による「横浜(寺家)ふるさと村」の紹介、佐藤明穂氏による寄稿「大鹿村を破壊するリニア中央新幹線」などを掲載しています。

購読申込みは川口章子

TEL 047146318721

✉ syuaki@pony.ocn.ne.jp まで。

●ウェブサイトででもご覧いただけます。

JACホームページ↓日本山岳会の活動案内↓自然保護委員会↓委員会ウェブサイト↓機関紙
http://www.jac.or.jp/info/jinkai/shizenhogo/newsletter.html

◆大峰南奥駆道山行のご案内

山行委員会

前鬼から熊野本宮大社までの南奥駆道を歩きます。前鬼小仲坊、持経の宿、行仙の宿、玉置神社、川湯温泉に泊まります。2泊食事付、3泊自炊小屋泊。自炊食料分担と寝袋持参で10kg程度の荷物となります。

ます。沢水利用。健脚の方を募集します。

日程 5月20日(土)～25日(木) 5泊6日

集合 20日13時 近鉄大和上市駅。大和上市駅から前鬼まではタクシーを利用します。

解散 25日8時ごろ 川湯温泉宿。バスにてJR新宮駅、紀伊田辺駅に連絡可。

行程 20日 林道車止め―小仲坊(標準歩程30分)

21日 嫁越峠―涅槃岳―持経の宿(標準歩程7時間20分)

22日 平治の宿―転法輪岳―仙の宿(標準歩程3時間40分)

23日 笠捨山―貝吹金剛―玉置神社(標準歩程8時間10分)

24日 大森山―五大尊岳―熊野本宮。標準歩呈9時間30分

費用 5万円(宿泊費、自炊食料代、傷害保険料、タクシー代、雑費)

申込み 4月15日までに住所、氏名、会員番号、生年月日、電話番号を明記の上、征矢三樹へ。先着15名限定。申込み者には詳細案内送付します。

✉ sanko@jac.or.jp

FAX 03-6886-4392

◆パミール・ハイウェイとワハーン渓谷 山行委員会

知られざる山岳国家タジキスタンやパミール高原を四輪駆動車で巡ります。最高地点は4655m、住民はパミール諸民族・タジク族です。キルギス族のゲストハウスに宿泊。車での移動のため、強力な体力は必要ありません。環境に順応できる方ならどなたでも参加できます。

日程 7月4日～15日(12日間)

多少前後にずれることあり。

西遊旅行社手配(登録旅行業第1種607)

費用 53万円くらい

応募人数 7～12名限定

(僻地で手配の都合などもあり、少しでも可能性のある方は至急お問い合わせください。)

申込み先 三井吉田江

TEL 090-7806-7601

TEL 03-3451-5388

✉ sanko@jac.or.jp

◆第33回全国支部懇談会
常陸の国・万葉の峰・筑波山へ
主催 公益社団法人・日本山岳会

茨城支部

期日 平成29年10月13日(金)～14日

(土) 宿泊 筑波山中腹・筑波山温泉
「つくばグランドホテル」つく

ば市筑波1050-1
TEL 029-866-1111

つくばエクスプレス「つくば駅」から無料送迎バスあり

参加資格 会員、準会員および関係者

費用 1万7000円(1泊2食
弁当付き、二次会、親睦登山を
含む)

申込み期間 5月1日～7月15日
(支部単位で一括申込み)

日程

1日目(10月13日(金) 12:00～

受付開始 13:00～開会式

13:30～講演会

①井坂敦実氏(郷土史家)「古代の山の信仰・筑波山を中心として」

②藤井敏嗣氏(元日本火山学会会長)「我が国の火山の現況・富士山も噴火するのか」

③山田明氏(茨城支部会員・元国土地理院職員)「100年目の剣岳三角点設置」(ビデオ映写と解説)

17:00～自由時間(入浴など)

18:30～懇親夕食会(アトラク

シオン「筑波おどり」
20:30～二次会

2日目 10月14日(土) 7:00～
朝食 8:00～親睦登山など
(左記4コースに分かれて実施)

Aコース(御幸ヶ原コース→筑

波山→白雲橋コース)

Bコース(白雲橋コース→筑波

山→御幸ヶ原コース)

Cコース(ケールカーを利用

し筑波山自然研究路を散策)

Dコース(つくば市内の国土地

理院「地図と測量の科学館」と

産業技術研究所「地質標本館」

の見学)

申込み・問合せ

日本山岳会 茨城支部事務局

西川元禧 〒300-1235

牛久市刈谷町5丁目2-9

TEL 029-872-7645

✉ nishiker@ybh.ne.jp

*募集要項は茨城支部のホームペ
ージに掲載します。

◆第5回小島烏水祭開催のお知らせ

第5回小島烏水祭(本部主催、四

国支部主管)を4月8日(土)に香川

県高松市の峰山公園で開催します。

ハイキング、讃岐うどんのご接待、

碑前祭、夕食会をします。希望者
があれば四国の名峰「三嶺」の登山
を実施します。

日程 4月8日(土)午前10時～午後
9時ごろ。

場所 香川県高松市の峰山公園

「はにわつ子広場」の小島烏水顕

彰碑前(第3駐車場から歩いて

3分)。夕食会は峰山中腹にある

ホテル「花樹海」。

内容 ①ハイキング(午前10時～

11時半)

②昼食ご接待(正午～午後1時

30分、讃岐高松山行会会員手作

りの讃岐うどん)

③碑前祭(午後2時～3時半、講

演会「小島烏水の弟・小島栄さ

んについて」講師・平林克敏さ

ん、詩吟、献花、記念撮影)

④夕食会(午後6～午後8時半、

ミニ講演会)講師・立山の山崎

カールを見付け、烏水の氷河研

究に影響を与えた山崎直方のお

孫様・山崎和男さん、ソプラノ

歌手による烏水祭を祝う歌、四

国支部会員によるフォークソ

ング演奏)

費用 ①②③は無料、④は1万円

*宿泊は各自で申し込んでくださ
い。

※オプシオンで9日(日)に三嶺(徳
島・高知県境)の登山をします。

8日夜に四国支部管理の菅生ロ
ッジ(徳島県三好市東祖谷山)に
移動します。費用は別途。

申込み 3月20日までに四国支部

の森山宏昭事務局長まで。

TEL 090-4971-1001、

✉ dgqw7un9@384.jp

宿泊は「花樹海」

TEL 0878-61-5580。

◆中村光吉展(山の油彩・写真)

会場 プリズミックギャラリー

東京都港区青山4-1-9 秋

元南青山ビル1F

会期 5月2～16日

開廊時間 2日 13:00～19:00

3～7日 10:00～19:00

8～15日 10:00～18:00

16日 10:00～16:00

連絡先 中村光吉

TEL 090-5339-6238

*作者在廊日 2～7日、13、14、

16日

◆編集後記◆

●今号で「谷口けい冒険基金」の設
立をお知らせしました。私も植村
直己冒険賞の推薦委員を務めてお
りますが、実は2014年の冒険
賞に谷口けいさんが選ばれていた
のです。ところが、「私にとつて植
村さんは憧れの人。今の自分の実
績では、そんな偉大な人の賞はい
ただけません」と固辞され、選考委
員会も授賞を諦めたのでした。

●そして2015年12月の遭難が
……。「あんなことが起こるなら、
なんとしてもあのとき、冒険賞を
受け取っていた良かった」と
いうのが、関係者の切なる想いで
す。志半ばで逝った谷口さんの遺
志を継いで、日本の多くの若者た
ちが、世界各地で冒険にチャレ
ンジしてくれることを期待したいも
のです。

(節田重節)

日本山岳会会報 山 861号

2017年(平成29年)2月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイッツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 小林政志
編集人 節田重節
Eメール: jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社